

# 聖天使ユミエルⅣ

セイントエンジェルス 第四巻

小説 黒井弘騎

挿絵 本町圭祐

立ち読み版

第一章

終わりの始まり

007

第二章

処刑執行——引き裂かれた光の翼——

053

第三章

戻れない奈落

096

第四章

絶望の都

131

第五章

エクリプス  
↳幸福ひかりと欲望かげ↳

156

第六章

聖なる闇

196

## 登場人物紹介

Characters



### 羽連 悠美

光翼天使ユミエルに変身して、エクリプスと戦い続ける少女。内向的かつ純情で無垢な人柄だが、その純粋さゆえに悪を憎む気持ちは人一倍強い。

### 羽連 真理

悠美が「ママ」と呼ぶほどに慕っている、彼女の育ての親。光翼天使マリエルに変身する。

### オメガエクリプス

すべてのエクリプスの頂点に立つ、影魔の王。洗脳していた真理の身体を母胎として誕生した。



これまでのあらすじ

自らの欲望たる心の闇に吞まれてしまった人間たち——エクリプス。

人に仇なす異形と化してしまった彼らを、人知れず狩り続ける者があった。たおやかな肢体を神聖優美な衣装に押し包み、燐光をまとって戦う美少女、羽連悠美。またの名を光翼天使ユミエル。

彼女は、頻発する行方不明事件に影魔の存在を見出し、敵のアジトへと乗り込む。そこで死に別れたはずの育ての母——真理と再会を果たすが、同時に最強の影魔・オメガエクリプスを生誕させることになってしまう。

圧倒的な力の前に敗れた聖天使は、おぞましい触手責めを味わわされ、果てしない陵辱に晒される。さらにはオメガエクリプスの企てによって、変身が半分とけた姿で、一般人たちへ羞恥の肉奉仕を強いられる。

守るべき者たちの手で汚され、その白濁にまみれる正義のヒロイン。  
少女の瞳から希望の光が失われていく……。



はあはあと荒い息が、自分の耳にも届く。濡れた声音は、蠱惑的な被虐の艶を隠しきれていなかった。何かを振り払うように首を振るも、甘い喘ぎは止まらない。自分でもわかる——人外の責めに、貪欲な女体はあさましくも女としての幸福を感じているのだ。淫核を啄ばまれアナルを扶られ、恐ろしい魔獣に為すすべもなく鬪られている状況に、嫌悪感とともに妖しい興奮を覚えてしまう。人外の責めに晒された肉体は、恥知らずにもその苦痛を快樂へと倒錯させつつあった。

「ら、らめなのお……流されちゃ、らめええ……！」

一秒ごとに、抵抗するための力が狂った悦感に触まれていく。拘束巨腕をはがそうとしていた両手は、もはや力なく熊の腕をさすることしかできなかった。

「けけ、呂律回ってないぜ？ なあユミエルちゃん、そんなことよりもっとやることがあるだろ？」

「そうそう。そんなのより俺たちのを抜いてくれよ！」

「え、ひあえ……あ、あああっ!？」

淫らな性に翻弄されつつある天使に、さらなる誘惑が触手を伸ばす。空中拘束された少女の左右から、一体ずつエククリプスが迫った。淫惨な媚態に、それぞれ巨大な男根を限界まで勃起させた怪人たちだ。白手袋に包まれた細指に、おぞましい肉感が押し付けられる。

「ほら、握れよ。もうギンギンなんだよ……またそのスベスベ手袋で抜いてくれよ、ひへへへ！」

——う……あ！ すご……熱くて、おつきい……！  
薄い手袋越しに、どくん、どくんと脈打つ肉の脈動が感じられる。どちらも甲乙つけ難い、ビール瓶並みの太さを持った怒張だ。すでに準備ができていよう、鈴口からはだからだと大量の先走りを流している。その匂気、熱さ、そして太さ。先ほどまで何度も握らされていた人間のペニスとは比較にならないほどの逞しさだ。恐怖感さえ抱かせる牡の存在に圧倒され、ユミエルはごくり、と生唾を飲み込んでしまっていた。

「どうした物欲しそうな顔して。あまりの立派さに見

惚れちまったかい、本当淫乱だな悠美ちゃんは！」

「う、うう……う」

酷すぎる悪罵に、少女天使は頬を染め悩乱する。だが、彼女自身言われて気付いてしまっていた——自分  
は両手の牡具に対し、恐怖と同時に妖しい期待感を抱いてしまっていたことに。たおやかな細指は先刻までの手淫奉仕の悦びを思い出し、うずうずと疼き出しているのだ。エナメル手袋に包まれた指先は徐々に曲がり始め、勝手に巨大根を握ろうとしてしまっていた。

——や、やあ……何を考えているの悠美!? だめよ、こ、こんなのに流されちゃダメええっ!

人々を救うべき光翼天使が自ら色欲に溺れるなど、絶対に許されることではない。気高き少女は必死で自身を鼓舞し、強靱な精神力を振り絞る。

「だ、だめですみなさん! 欲望なんか流されないで……お願い、人間だったときのことを忘れないで!」

ごくりと涎を飲み込むと、聖少女はきつく唇を噛み

締めて誘惑を振りきった。悲痛な声で人々に訴え、涙に潤んだ目で人々の瞳を直視する。だがそんな健気な姿こそが、外道の欲情をそそり立てるので。

「ひゅーっ! 健気だねえユミエルちゃん、流石は正義の天使様だ! だけどねえ……そんなキミだからこそ汚しつくしたいんだよ。力づくでさあ!」

叫び、左右のエクリプスたちは少女の手を取った。毛むくじやらの獣の指と、鱗を生やした爬虫類の掌が、それぞれ白い手袋に被せられる。欲望の影たちは、そのまま力づくでペニスを握らせてきた。

「あ、痛っ! やっ、な、何をするんですか……!」

いまだ痛みの残る両手を乱暴に扱われ、悲鳴をあげる変身少女。ペアハッグで締め上げられている状態で左右の手を掴まれ、大きく腕を広げた十文字の体勢で空中磔はりつけにされてしまう。左右の指はそれぞれ怪人に押さえ込まれ、力づくで勃起肉を握らされた状態だ。

「何って、さっきから言ってるじゃねえか。この素敵

な手袋で楽しんでみてえんだよ、こうやってよお！」

下卑た笑い声をあげると、エクリプスたちはそれぞれ腕を動かし始めた。掴んだ天使の掌を自分の男根に被せ、そのまましゅしゅつと前後させる。エクリプスたちは天使の指をオナホール代わりにし、あさましいマスターベーションを始めたのだ。

「へへ、この感触。変身ヒロインの手袋最高だ！」

「ちっちゃなお手手も可愛いねえ。おおお、こりゃ気持ちいい、自分でシゴくより全然いいぜ！」

欲望に正直な怪人たちは、口々に不名誉な寸評を述べた。滑らかなエナメル生地で勃起根を包み込み、しなやかな指肉を用いて扱かせる。

「ひああ、いや……こ、こんなのいやあ！ やめてえ、お願い、もうやめてください……！」

尊厳を辱められ、たまらず恥辱の涙が流れる。輝かしい天使の衣も、聖なる剣を振るう細腕も、正義の誇りに満ちたものだった。なのに、それをまるで性玩具

のように挿捻され、男たちの獣欲を満たす道具として弄ばれている。たまらない恥辱と情けなさに、ユミエは涙混じりに許しを乞った。だがエクリプスたちの自慰行為は収まらず、手袋の中の太棒は一秒ごとに質量を増していく。先走りですらされたエナメル生地を通し、おぞましい性の脈動が伝わってきた。

——う、あ……すごつ。あ、熱くなってる……どく

どく脈打って、どんどんおつきくなってるよお……！  
隙間なく肉棒を握り込まされた両のお手手で、これでもかというほど牡の逞しさを感じさせられる。ヌルヌルした爬虫類のペニスと、毛むくじやらの獣のペニス。左右でそれぞれ形は違うが、どちらも人間のペニスとは比較にならないほど太く逞しかった。牝を蕩かせる圧倒的な存在感に、少女は淫らに感じ入る。生唾が溢れ、ゴクリと勝手に喉が鳴ってしまっていた。

「へへ。どうしたよ。急に大人しくなっちゃって。さつきまでの凛々しさはどこ行った？」



「決まってんだろ。俺たちのチンポが嬉しくてどうでもよくなつたんだよ。どうしようもねえ淫乱天使だ！」

「い、いや……言わないでください。わたし、そ、そんなことありま……あう、くうううううっ！」

正義の矜持を挫かれ、痴女の烙印を押される。悔しくて悲しいのに、純真な少女は否定することさえできなかつた。言われた通りだつた。手袋越しに伝わる感触や、ヌルついた先走りの臭気がいとおしくてたまらないのだ。天使の理性は、徐々に溶かされつつあつた。

——だ、だめよ悠美っ、しっかりしなくちゃ！ ああ、でも、こ、こんなのつてえ……！

必死で唇を噛み締め、ユミエルは快楽から意識を切り離そうとした。だが、数えきれない淫獣たちに包囲された現状が、そんな健気な抵抗さえも許さない。ピンピンに勃起した淫核はハゲタカにきつく啄まれ、疼く尻穴は奥深くまでアリクイの口で穿り責められ、おっぱいを熊に食われながら全身を引き絞られている。

苦痛と快楽がいたるところで炸裂し、恥辱と背徳が入り混じってマゾヒスティックな昂揚を覚えてしまう。心臓の鼓動はうるさいほどに速くなり、Cカップの美乳はさらに張りを増して淫らに膨らんでいた。

「グワオオ、こいつあなんだ？ 乳首まで立つてきたじゃねえか……ググ、美味そうだ！」

——ひ、ああっ!? や、そ、そこは……！

快楽に従順たる女体は、意思に反してあさましい反応を隠そうとしない。両乳房では先端のぼちちが充血し、黒いボディスーツを押し上げてコリコリに勃起してしまつていた。口内の乳房の変化を感じ取った熊男は、長い舌をひらめかせて弱点をしゃぶり舐める。

「ひあああ、ち、乳首……いいいいイッ！」

ぢゅるっ、ぐじゅにちゅるっ！ たっぷりと涎を含ませた肉舌が、まるで蛇のように乳首に絡みついた瞬間、鋭くも心地よい電流が乳芯を焼く。性感帯へのピンポイントな愛撫に、たまらずよがり悶える聖少女。

激しい乳虐の中、ぬるぬるとしゃぶられる痛痒感が心地よい。生暖かい唾液がスーツから浸透し、乳腺にまで汚辱の実感を刻まれる。痛みと同時に与えられる惨めな悦びに、少女は背中を仰け反らせて感じ入った。

「グオオ、ここを感じるんだな……ならもつとだ。死ぬほどよがらせてやるぜ正義のヒロイン様よ！」

鋭敏な反応に悦び、熊男はさらに責めを激しくした。粘液を塗り込められいっそう感度を増した乳首を、軽く牙を立てて噛み責める。スーツ生地を食い破り、コリコリした勃起豆にずぶりと牙が突き刺された。

「あひっ、ひあああ！ くう、つうううううー！」

太く硬い牙で、鋭敏すぎる肉豆をピアッシングされる。乳腺にまで異物を差し込まれ、痛み以上の切なさが胸を焼く。人間ではありえない凶悪無比な責めに、正義のヒロインは涙を流して悶え狂った。

「あーあ、だめだよ。もつと優しく吸ってあげないと悦ばないよ。そうだよね、お姉ちゃあん？」

凄艶な悶え様に誘われ、新たな影魔が近づく。天使の左側に陣取ったのは、見るもおぞましい異形の怪人だ。瘦身矮躯で、赤黒い表皮は粘膜質に濡れ光っている。頭部は細長く伸び、先端では吸盤状の丸口が蠢いていた。吸血ヒルと人間とを合成したような怪人が、ぬるついた掌で空いている左胸をわし掴む。

「お姉ちゃんのおっぱい、ボク大好き。ね、吸ってもいいでしょ？ お姉ちゃんも吸われたいでしょ！」

「え、え……あ？ キ、キミは……」

醜悪な外見に似合わない、子供のようない無邪気さ。その喋りぶりで理解した。小柄なヒル影魔は、かつて自分に憧憬を抱いていた少年が変質した者なのだ。

——そ、そんな……。わたしのせいで、キミみたいな子まで、エクリプスに……。

幼さゆえの執着心が欲望の影を刺激し、このようにおぞましい姿に成り果てたのだろう。それもすべては自分のせいだ。罪悪感に胸を焼かれ、ユミエルは目を

伏せて慙愧する。だが影魔の少年には、そんな少女の純真はまるで届かなかつた。

「気にしなくたっていいよ。ボクお姉ちゃんに喜んでもらいたくって、そのためだけにこの姿になつたんだ。見てよこの口……これでたつぷりとおっぱい吸って可愛がつて、死ぬほどイカせてあげるからね！」

「え、え……ひあああ!? そんなあ、だめっ。だめよ、ま、またおっぱいばかり……っん、んふううう！」

ぬるついた両手に左乳房を掴まれ、ぎゅうううと搾るように揉み込まれた。勃起した乳首が縊り出され、スーツにぽっこりと浮き出してしまふ。勃起した敏感豆が、肉のホースにぱくりと一口で飲み込まれた。

「ひ、ひああ……あうううっ！」

瞬間、スーツ越しに伝わる切なさに、金髪天使は頤むかひを痙攣させ感じ入る。ヒルの口の中は暖かく、ドロドロとぬるついた粘膜で覆われていた。内部粘膜は常に流動し、飲み込んだ物を三百六十度から休むことなく

撫で続ける。ボディスーツ越しに乳首を蕩かす肉の動きに、先端だけでなく乳房全体が感じてしまふ。

——な、なにこれ……!? こんなのはじめて……す、すごい。乳首が、溶けちゃいそう……!!

ただ飲み込まれただけでもこれほどまでに気持ちいいのだ。この上吸い嬲られたら、一体どこまで狂わされてしまうのか、恐怖さえ覚えてしまうほどの期待感に、たまらず子宮がきゅうつと疼いてしまふ。そんな淫乱天使の期待に、少年影魔は十二分に応えてくれた。

「ふふ。じゃあ吸うよ……いっぱい感じてよね！」

「や……やああ。やめてえっ。乳首敏感なのっ、そこをこんなので吸われちゃつたら……っひあああ!」

くちゆる、んちゆるちゆるちゆるちゆるう! 少女の哀願虚しく、淫虐の責めが開始された。快樂豆を呑み込んだ肉管内部が、ぐちゃぐちゃと激しく蠕動し始める。さらにはそのまま同時に強烈に吸い上げられて、スーツ越しに肉粘膜でどろどろに愛撫される。

——す、吸われてる……乳首、めちやくちやにされてる！ す、すごつ、感じちやううう！

乳首が切ない、あまりにも切なすぎる。まるで、快楽神経が蕩けたような切なさだった。想像を絶する異形の快楽に打ちのめされ、金髪を振り乱して狂乱する変身少女。狂ったように細腰が跳ね回り、濃厚な白蜜をとこる構わず飛沫しぶかせた。

「ひあッ、らめ、らめえ！ ち、乳首……いひいひいイ！ おっぱひがあ……ひい、ちくびいイイ〜！」

「喜んでもらえて嬉しいよ。もつとよがつていいよ、もつとおっぱい虐めてあげるからさ……ほらほら！」

んじゆるっ！ ぐちゆ、じゆるるううう！ 休むことなく続く吸引、休むことなく続く魔の乳悦。

「い、いやああああん！ らめえ、も、もう吸わないで……ひあああア！ すつ、すごひ……イい〜！」

少年の手管に、年上の美女は僅かにも耐えられなかった。責められるままに情けなく嬌声を搾り取られ、

四肢を悶えさせて悶絶する変身ヒロイン。両手で乳房を搾られながら肉筒内で肉豆を吸い嬲られ、ユミエルは呂律の回らない声で悶えまくった。

「どうお姉ちゃん。気持ちいいでしょ？ ボクにおっぱい責められて、感じちやうてるんでしょお？」

「ち、ひがうう。そ、そんな……は、ひ、すごひいひいっ！ らめつ、らめなの……キミに責められると……

……乳首感じちやうよお、く、狂つちやうのお〜！」

想像を絶する快楽の波が、左乳房から心臓までを貫いていく。幼い少年にいいように弄ばれる敗北感が、倒錯した悦びを引き起こす。怒涛の狂悦に逆らえず、ユミエルはあさましい嬌声を吐き散らしていた。ついに弱みを隠しきれず、「いい、いい」と知らずのうちによがってしまう。紅潮した幼貌は淫らに艶を増し、獣たちに犯される背徳の悦びに染まり始めている。正義の矜持は、黒い肉悦に犯されつつあった。

——き、気持ちいい……。だめっ、感じちやダメな

のに……：すごすぎて、我慢できないよお……！

快感が否定できない。そして、そこで快楽を意識してしまったのがいけなかった。啄まれている淫核、ピストンされている尻穴。虐められる双丘にペニスの感触を覚え込まされている両掌——いままでは必死で堪え、辛うじて耐えていたに過ぎないのだ。そんな状態で、少しでも気を許してしまえば——

「んああ、んあああああッ！ すごいの……：お豆も、お尻も……：つくひ、んひいいいイイッ！」

嫌悪でも拒絶でも苦痛でもない、媚びた嬌声をあげよがり狂う淫乱天使。あさましすぎる涕泣は、欲望に従順たる牝犬の、心からの叫びだった。

「い、いひのお……：らめえ、らめなのにすごい、きもひいいのお！ わたひいつ、も、もおらめええエ！」

もう、声が抑えられない。そして声を出したが最後、いままで耐えてきた心にピシリと亀裂が走った。

もう抗えない。気持ちよくて、溺れてしまう——！

「ああああ、ふあ、もつと……：もつとおお……！」

恥辱とともに、解放の歓喜が心を満たす。涙を流しながら、ユミエルは物欲しげに身体をくねらせた。無理矢理にペニスを扱かされていたはずの両手は、いつしか自分から指を動かし始めている。

「おおつ、すげっ！ やっぱりエッチだなユミエルちゃん。その指使い、すげえ気持ちいいぜ！」

少女のおやかな指が、たどたどしくも果敢に剛茎を愛してくれる。しっとりした手袋の摩擦感や、気遣ってくれるような優しい指使いが、たまらなく肉欲を掻き立てた。エクリプスたちの逸物はそれぞれ二回りも径を増し、どくどくとおぞましい脈動を増していく。

——あああつ、おちんちん、悦んでるよお……！

手袋越しの感触が嬉しくて、もう痛みなど忘れてしまった。実直な反応に、黒い悦びが去来する。もはや理性を蝕まれつつある天使は、指の速度を速めて淫辱の奉仕に耽溺した。噴き出す先走りが手袋をぬるぬる

と汚し、むせ返る性臭が鼻腔を擽る。艶っぽく息を荒げる天使の周囲に、さらなる獣たちが集って行った。

「牝豚が。自分からバケモノに奉仕してやがる！」

「なあ淫乱ヒロインさん、俺たちのも相手してくれよ。もう待ちきれねえからよ、どこでもいいぜ！」

ギンギンに勃起したペニスの群れが、四方八方から突き付けられた。赤黒く膨張した巨根や肉瘤を突らせた剛茎、大きく雁首を広げた業物やヌルついた光沢を放つ粘膜棒——いずれも劣らぬ極上のフランクフルトが、よりどりみどりの状態で差し出されている。

——すごい……おちんちん、こんな……！

たまらない光景に、ゴクリと生唾を飲み込む淫乱少女。これほどの数に責められたら、一体どうなってしまうのか——被虐の予感に、子宮がきゅんっと疎んでしまう。だが破滅から逃げようにも、ヘアハッグで押さえつけられた拘束状態ではどうしようもない。なすがままの生贄に無数の肉牙が無遠慮に突き付けられた。

「俺は顔だ。可愛いお顔、めちゃうちゃにしてやる！」

「わたしは髪ですね。美しい天使のプラチナブロンド、真っ白に染めてあげますよ！」

変質者じみた欲望とともに、エクリプスたちのペニスが伸びる。魔悦で小刻みに痙攣している幼顔に、数本の肉蛇が迫った。ミミズや大蛇を思わせる形状に変質した触手ペニスが、天使の頬をぐにゅりと抉る。

「や、お顔はいやあ。顔は許しへえ……えひい！」

そこだけはいやらしくも人間と同じ形状の亀頭に柔頬を抉られ、ねっとり先走りが塗り込められる。汚辱感に怯えた童顔に、さらに数本の触手根が押し当てられた。両のほっぺが同時に犯され、乱れた金髪にも何本ものペニスが突っ込まれる。勃起触手はそれぞれ激しく蠕動し、女の命を思うがままに蹂躪していく。

——こんな、か、髪も……顔もお……い、いやなの  
にい。わたし、こんなところまで犯されて……！

牡の鼓動がどくどくと脳に響く。決定的な汚辱感に、

ぼろぼろと涙が流れた。頬責めペニスから嘖き出す先走りか、悲哀の涙と混じりあつて顎先まで流れていく。

「あゝ泣いちゃったよ。可愛そうに、顔はねえだろ」

「そうそう、キミたち全然わかつてないよ。変身ヒロインやるなら、やつぱコスチュームでしょ！」

先走る新手の牡肉が、ところ構わず擦り付けられる。汗に濡れたボディスーツや、身じろぎで振れてしまつたケープ。フェティッシュな変身ヒロインの衣装に、数えきれないほどの男根が押し付けられた。

「俺は足だな。むちむちした太もももいいが……へへ！　ここ、犯してやりたかつたんだよなあ！」

さらに新手のエクリップスが迫る。左右一匹ずつ、挟み込むように迫つた怪人たちは、それぞれが少女の足腰に手を伸ばした。激しく痙攣する太ももを掴むと、ニーソックスの上端に指をかけて布地をめくる。

「ふえ、えっ!?　そ、そんなところで、なにを……」

ソックスが引つ張られ、布地をめくられ太ももが晒

される。靴下の隙間から、蒸れた汗臭がむわつと香つた。太ももを伝つてきた漏蜜が、隙間から足先にまで入り込んでいく。自分の恥液で足指までを汚され、ユミエルは爪先を伸ばして恥じ入つた。怯えながら必死に声に出した問い、答えは最初から決まつている。

「何つて、へへ！　このニーソの中にチンポ突っ込んで、コスチュームごと足もドロドロにしてあげるつて言ってるんだよ。わかれよな淫乱バカ天使！」

「え、え。おちんちん、そんなところに……いい！」

ずぶり！　ずぶずぶりっ！　変態的な欲望を吐露すると、怪人たちは予告通りの挿入を進めてきた。両のニーソックスがペニスの形そのままに膨らみ、守るものない太ももに勃起根がめり込まれる。フェティッシュな部分に己が分身を預けると、影魔たちは激しく腰を振り始めた。ぐちゃぐちゃと淫らな音を立てながら、硬く勃起した亀頭が柔肉に食い込まされた。

「おお、これだよこれ。へへ、たまらねえ！　変身ヒ

ロインのニーソコキ、すげー気持ちいいぜ！」

ニーソックスの裏地の滑らかさと、若さ溢れる太ものむちむちした肉感が、同時に勃起根を愛撫する。倒錯した欲望を満たし、エクリプスは狂ったような喜声をあげた。大量の先走りが溢れ出し、清潔そのものの白靴下に内側から汚らしい染みを広げていく。

——や、あ。こんなとこまで、犯されてる……！！

光翼天使のシンボルを欲情の道具として見なされ、その上そんな変態的な場所を犯されるなんて——恥辱と屈辱が心を打ち、ペニスの熱さと雄々しさが肉を蕩かせる。惨めだ、でも気持ちいい。倒錯したマゾヒズムが、少女の淫らな官能を燃え立たせる。瞳は潤み、清楚な童顔は被虐の艶に染まりきっていた。

「お前は最高の玩具だなユミエルさんよ。やらしい表情……バケモノに犯されて喜んでやがるぜ」

「本当は犯されたくて正義の味方やつてたんでしょ？ とんだ変身ヒロインもいたものですね！」

「本当、犯されるためにあるような身体とコスチュームだよな……おほっ、このスベスベたまんねえや！」

悪辣な批評を下しながら、魔人たちはそれぞれ激しく腰を振り、各々が狂った快楽を貪り続けた。あまりに酷い言葉が、天使の純真をズタズタに切り刻む。

「ひいん……違う、違うんです。そ、そんなこと言わないで……んああ、そんなに動かないでえーっ！」

正義のヒロインとしての尊厳を地の底にまで貶められ、痴女以下にまで蔑まれる。羞恥と屈辱に必死で首を振る天使だったが、もはや心身を焼く快楽には逆らえなかった。顔に、髪に、太ももに両手に——全身に伝わってくる牡の存在感に、言葉を捨てて耽溺する淫乱少女。いやいやと首を振れば、ほっぺたや髪に絡んだペニスの感触に脳味噌を蕩かされる。今も続く淫豆責めで太ももが痙攣すれば、ニーソックスに挿入された男根をいっそう喜ばせてしまう。両の指先は戦慄わななきながらも健気にペニスを握り締め、しゅしゅと扱き





続け貪婪に肉感を食っていた。前髪から鼻先にまで垂れてくる先走りの性臭が、少女の理性を狂わせていく。

——あ、あ……ダメ。わたし、もお……！

流されていく——光翼天使としてのプライドが蕩け、あさましい快楽へと傾倒していく。前後から責められている腰もひっきりなしに痙攣し、ショーツに浮き出した秘門からはだらだらと愛蜜が溢れ出して止まらな。太ももから爪先にまで垂れた濁液の濃厚な白さが、少女の感じている悦楽の深さを表していた。

「おいおいダダ漏れじゃねえか、エッチだなあ！」

発情した牝の香りが、いつそうの欲情をそそり立てる。ハゲタカ魔人は舌鼓を打つように嘴を打ち鳴らし、カツンカツンと肉豆を噛み潰すように擦り責めた。

「あ、んつきいいい！ おっ、お豆きつ……んおおお おおお尻もらめえ、ひいいん、深ひのおおー！」

神経を焼かれる虐悦。辛いほどの切なさに、もう腰を止めていられない。だが腰を動かせば、尻穴責めの

口吻がいつそう深くにまでめり込んでくる。めりめりと腸管が軋み、直腸奥まで鼻面が突き込まれた。

「は、激し……らめええ、激しすぎるううウ！」

ビリビリビリィ！ あまりの激しさに耐えきれず、白いショーツが引き裂けた。甘酸っぱい体臭がむわつと香り、汗まみれの尻たぶが露に晒される。肉嘴を咥え込んだ菊口は、ひくひくと嬉しそうに痙攣していた。

「アナル痙攣してるよ、感じてくれるんだね、嬉しーいよ悠美ちゃん。じゃ、もつと穿つてあげるからね！」

「ひい、つひい！ やめ、も、もう動かないで……これ以上虐めないで……つくああ、あおおおッ!？」

じゆるっ、ぬじゅっくじゅっくじゅっ！ 突如、肛内での激感が激しさを増した。ショーツを食い破ったアリクイが、激しい勢いで舌を出し入れし始めたのだ。

「ひい、ひいインッ！ お、奥まできちゃううう……深いよおお、お尻すごいっ、すごいすぎるうううー！」

アリクイの舌は、細いが異常なまでに長かった。数

メートルも伸びる肉蛇が、大腸はおろか小腸にまで入り込んでくる。未曾有の深度まで犯し抜かれ、腸粘膜がビクビクビクと戦慄いた。と思えば一気に引き抜かれ、狂おしいほどの排泄欲に打ちのめされる。たまたまない嫌悪感と妖しい肛悦とに追い詰められ、少女天使は狂ったように尻を振りたくって乱れまくった。

「っひああ、ま、また抜かれて……ひいん、また入れられてる、奥まで犯されてるうう！ らめえ、こ、こんな続けられたらっ、お尻狂っちゃうよおッ！」

人間相手では絶対にありえない、数メートルもの長舌による超ロングストローク。たまたまず腰を突き出し、ユミエルはなんとかアクリイから尻を離そうとした。

と、思いっきり仰け反らせた前門に、異様な違和感が感じられる。何かとてつもなく大きく遅い物体が、前の門に押し当てられている——

「うあ、あ!? こ、これって……うふあああつ!?」

その正体を認め、少女はたまたまず情けない悲鳴をあ

げてしまった。ベアハッグで拘束されている自分の正面には、巨大な熊男の身体が位置している。その腰から生えた巨根が、真正面から突き付けられていたのだ。しかも、そのサイズときたら——！

——う、うわあ……これ、おつきすぎるよお……！  
あまりの質感に、目が釘付けになってしまった。熊男のペニスには巨軀そのままに大きく、太く、遅しかった。その質量たるや、少女の細腕にも匹敵するほどだ。野太い砲身は急角度で反り返り、おぞましいほどの生命力に満ち溢れていた。表面には極太の血管が浮き出し、蛇のようにビクビクと脈打っている。怪物じみて太い亀頭、大きく広がった雁首。その造形は、もはや性器というより一つの凶器にしか見えなかった。

「俺もピンピンになっちゃまったぜ……限界だア。お、お前じゃちっちゃすぎるけどよお……その濡れ濡れマ  
○コ、プチ込ませてもらうぜ天使さまあ！」

「ふあ、ふあああん？ ひ、み、みみらめええ……あはああ、またイひいいいん！」

オルガの余韻冷めやらぬ弱点を、容赦なく舐めしやぶられる。そのたび、辛いほどの甘悦が脳裏にまで迸った。なんとという心地よさか。耳朶は性粘膜じみて感じやすく、耳殻はクリトリスそのものの鋭敏さだ。そして耳穴は、まるで飢えた牝穴のように淫らになつてしまつていた。どうすれば耐えられるかもわからない弱点が、執拗なまでに何度も何度も可愛がられる。

「ママにもこうやつてキスされてたんでしょ、そのたびにイっちゃつてたんだ……あはは、変態！」

「ひあ、ま、ママはちがああ……ひいあうらめらめらめえ！ みみのなかあ、い、いれなひれええ！」

ちゅぷつ！ にちゅちゅぷにちゅつ！ 大量の唾液を塗り込みながら、魔姫は力強く舌を中耳に突き入れてきた。アソコを串刺されるのにも似た、いやそれを遙かに上回る悦び。耳穴をピストンされるたび、脳髓

までが快感で痺れてしまう。くちやくちや、にちゅにちゅと反響する涎音が、聴覚までもを逃げ場のない快楽で犯し尽くす。まるで、耳のファックだった。

「んふああああ、みみ、みみい！ そんふあ、そんなひされたら、まは、またすぐイカされえ……！」

切なくもどかしく、辛いぐらいに心地いい——ちゅぷり、と涎まみれの肉舌を突き込まれた瞬間。

「イふう……も、もうイっひやうう！ またみみれえ、みみおかされへイっひやうのおお！！」

ピクピクと翼を痙攣させ、二度目の耳絶頂を極めさせられる変態天使。噴き出す愛液が、地面にまで垂れていく。気持ちよすぎて、脳髓が溶け出しそうだった。

「あら、もうイっちゃつたの？ 串刺しにされてもイッちやうし、碟にされてもイッちやうし。耳でもイカされちゃつて……もう何回目？ 本当にどこでもイケるのねお姉ちゃん。ふふふ、だつたらあ……！」

絶頂直後の弱点を執拗にしゃぶりながら、オメガエ

クリプスはすつと手を伸ばす。細い指が挿んだのは、イクたびに怯えたように震える光翼天使のシンボル——少女の背で燐光を放つ、光の翼の根元だった。鋭い爪が、左の翼に食い込まれる。

「んひあ、つひ!? いたあ……ひ、あああうっ!」

オルガの余韻を振りきれぬ中、ユミエルは背中に走る苦痛に絶叫した。羽根がミシミシと軋んでいる。細身からは信じられない力で、翼を無理矢理引つ張られているのだ。根元が軋む。このままでは引き千切れてしまう——恐怖した瞬間、魔王の指が力を増し、

「こんなのでも、エッチなお姉ちゃんならイっちゃやうよねえ。あはっ、あっはははは!」

びりい! べりべりべりい! 凄まじい断裂音とともに、光の羽根が散華する。天使のシンボルの一枚は、無惨にも根元から引き千切られてしまっていた。

瞬間、駆け抜ける未曾有の激痛。

「ひ! ぎ! ぎやあああああ——ッ!!」

肉体の一部を剥ぎ取られる凄まじい痛み。これまでの快楽も消し飛んだ。片羽を引き千切られた苦痛に、金髪を振り乱し絶叫する聖少女。残った右翼がバタバタとざわめき、涙のように羽根を撒き散らした。

「ひぎっ! いぎいい! ひあ、あぐううウー!」

痛い。痛い痛い痛いイタイ。泣いても叫んでも消えない惨苦。あまりのショックに、身体の痙攣が止まらない。十字架に磔られた四肢を震わせ、声の限りに苦悶する片翼の天使。陰惨な悶姿は、目を覆いたくなるほどに痛ましかった。

「あれおかしいなあ、イケなかったの? でも大丈夫、もう一つ残ってるもん。こっちはもつと激しくしてあげるからきつとイケるよお……あははは!」

「うぐえ、えぎい……そんなあ、またあああ!」

引き千切った左翼をつまらなそうに投げ捨てると、オメガエクリプスは残った右翼に手をかけた。先刻同様、凄まじい力で鋭い爪がめり込まされる。ピクッと

怯えた光翼が、再びめりめりと引き千切られていく。

「ひ！ ぎ！ や、いやいやいやあ！ もうやめへえ、やめへくらしい！ おねがひれふつオメガエクリプスさまあ、許しつ、許しひへくらしい〜」

痛い。怖い。痛い怖い痛いコワイコワイ。逆らえぬ恐怖に犯され、ユミエルは矜持をかなぐり捨てて懇願した。ぼろぼろと涙を流し、哀れみを誘う表情でかつての怨敵に媚びを売る。「許して、許して」と何度も頼み込む。その様はあまりに憐れで、とても正義のヒロインが晒すものとは思えないほど惨めだった。

「んん〜？ そうねえ……」

「だ・あ・めえ♪」

ずぶつ、ずぶずぶずぶりい！ 細指に力が込められ、尖った爪が奥深くにまで食い込まされる。

「ぎ、ひぎいイ！ 痛ア、いたアああうう〜ッ！」

右の翼を、再び絶望的な苦痛が襲う。凄まじい激感

に、金髪を振り乱して悶絶する淫虐の天使。ぺろぺろと耳を舐められれば辛いほどの快感に追いやられ、翼に力をかけられれば凄まじい痛みに苛まされる。同時に味わわされる天国と地獄に、ユミエルは狂ったように悶えまくった。

「怖がらなくても大丈夫よ。今度はもつと気持ちよく殺してあげるから。ふふふつ、あははははは！」

上機嫌の笑みを浮かべ、オメガエクリプスは獲物に身体を摺り寄せた。悶えるたびに震える美乳に未成熟な身体をぎゅつと押し付け、足を開いて天使の腰に絡みつける。ゴシックドレスが翻り、スカートから生白いお尻と可愛らしいパンティが覗く。白衣を纏う可憐な天使と、黒いドレスの幼い悪魔が艶かしくその身を密着させ絡み合う——その光景は、ひどく背徳的で妖しいまでに淫靡だった。

「んふ……んつちゅ。んちゅ、ちゅぶ……」

「あ、あふああ……ん、ひあ、うう……っ！」

曝け出した生足を蠢かしながら、激しく舌を抜き差しし耳を舐め犯す影魔姫。密着した魔少女の欲情に犯され、天使は千切れかけの羽根を震わせよがり泣く。喘ぐたび揺れる胸房へ、上品な指先が伸びていった。

「ねえお姉ちゃあん……これ、わたしに頂戴♪」

悪魔が掴んだのは、聖なる天使のシンボルだった。

「あ……あ。そ、それふあつ！」

白いケープを留めているロザリオが引つ掴まれ、そのままぶちんと引き千切られた。留め金を失ったケープが肩から落ち、天使は水着のようなボディスーツを纏っただけの格好に剥かれてしまう。

——あ……。いやあ、ママ……恵理子お……！

ドクン、と心が痛む。ユミエル、いや悠美にとつて、胸に頂く十字架は自分の想いの結晶だった。気高き母の想いと、優しい親友の想い。その両方が詰まった、大事な大事な贈り物なのだ。それを引き千切られ、壊れかけていた少女の心に寂寞の想いが宿った。

「ふあ、い、いや、いやあ！ か、かえひへえ……。それだへはらめ。おねがひい、返してえ……！」

もはや正気かも定かではない。それでも、少女はうわ言のようにそれだけを口にした。剥き出された撫で肩がピクリと動き、何かを求めるように指先が蠢く。痛めつけられている翼が、僅かに光を強めた。ロザリオを見つめる瞳は、息を呑むほどに澄み渡っている。

「へえ……まだそんな目ができるんだ。ふうん、そうなんだ。ごめん、見くびってたよ……」

串刺して磔にして引き裂いて、身も心も汚し尽くした。もう壊したと思っていたのに、天使は自分の意志を見せた。予想外の出来事に、オメガエクリプスは一瞬責めを中断する。だが、それも一瞬だけだ。

「ふふふふ、あはは……ごめんねお姉ちゃん、もう手抜きはなしよ！ もっと容赦なくしてあげる、メチャクチャに犯し抜いて殺してあげるわァ！」

見開かれた瞳に、赤い魔光が宿る。再び浮かべられ

た狂笑は、さらに邪悪なものだった。全身から闇のオーラが噴出し、天使の聖気を蝕んでいく。手にかけている光翼は怯えたように光を弱め、ドレスに触れている聖衣からは輝きが失われた。左手に握られていた十字架はぐずぐずとその形を崩していく。あまりに凄まじい影魔の邪気が、銀のロザリオを蝕んでいるのだ。

「あ、あああ……やめてえ！ それは……そ、それだへはあやめ……ひぐうう、おぶごおああ——！」

悪魔の掌中で、大事な思い出が壊されていく。ユミエルはなげなしの心力を振り絞り、悲痛な声で哀願する。だが、処刑台の天使には僅かの訴えも許されていない。なかつた。掴まれた左翼から染みてくる闇の波動が、翼を腐らせ肉にまで苦痛を叩き込んでくる。串刺し触手がピストンを速め、耳への愛撫も苛烈さを増した。迸る虐悦、増していく破壊の悦び。敗北のヒロインは、魔悦に抗えず惨めに悶え泣かされるのみ。

—— ママ、ママあ！ 恵理子、恵理子お！

涙に濡れた視界の中、思い出が汚されていく。ロザリオは、まるで水飴のように溶け崩れていた。百合花を模した十字の先端が融解し、鉤状に鋭く尖っていく。魔少女はピックのように変形した十字架をくるくると弄ぶと、長針と化したその先端を少女に向けた。

「いいよ。そんなに欲しかったら返してあげる！」

声とともに、力いっぱい腕を振り下ろす。鋭い針が狙うのは、激しく上下する少女の左胸——激しい陵辱に興奮しきり、勃起した先端をボディスーツに浮かせている、痛ましいほどに敏感そうな乳首だった。

「ひ、い！ うああ、そ、そこお……ひああ！」

ズブリ！ 細い先端が、生地を貫き乳窪に突き入れられる。乳首に走る虐痛に、涙を零し悶絶する変身天使。生贄に対し、神の取った行動は残酷だった。

「遠慮しないでいいわよ。返して欲しかったんでしょ……だったら受け取りなさいよお、ほらほらア！」

「ひ、い……くひい、ひつきいひい——ッ!!」



ドズッ！　ズブズブ！　思いきり力が込められ、少女の左胸に十字架が押し込まれていく。形を変えた思いが、乳腺を貫きおっぱいの内側にまで埋められる。「き！　ひ！　乳首ッ……痛ああああア！　ひぎいいいい、お、おっぱいいいいいい——ッ！」

鋭い針で乳腺を抉られ、乳首全体で硬質な銀柱を啜え込まれる。信じられないほどの衝撃が、乳房を通して心臓にまで叩き込まれた。あまりの虐悦に、ユミエルは金髪を振り乱して泣き叫んだ。

「あはは！　ママやお友達と一緒に連れて、そんなに嬉しかったの？　よかったねお姉ちゃん！」

淫惨な悲鳴を楽しみながら、オメガエクリプスはぐりぐりとロザリオをひねり回した。乳管を穿り返すような回転を加えながら、何度も何度もピストンして乳腺葉までもを穿ちまくる。同時に右手にも力を込め、ピクつく光翼を根元からむしり千切っていく。

「ひふう、ひぎいい！　き、は……んぐううウー！」

鋭敏すぎる乳首を穿ち壊され、身体の一部を引き千切られる。あまりに壮絶な二点責め。しかも魔少女の手管は、先刻よりも遥かに狡猾で残酷だった。より長く苦痛を味わわせるため、一気に引き裂くことをせず、ゆっくりゆっくりと力をかけて羽根をむしってくるのだ。胸と背中、長く続く被虐のシンフォニー。気が狂ってしまった。だが、終末の支配者の姫はそんな安易な終焉を許さない。

「そう簡単に狂わせないわよ……べろ、んちゅ」

「ひぎい、ひ……ふあああ!?　ふああ、みみはらめえ……ふあああ、みみつ、き、きもひいいい！」

ぺちやぺちや、くちゆくちゅ。優しく耳を愛撫されると、死にたくなるほどの苦痛と同時に、至高の幸福が覚え込まれてしまう。あまりの気持ちよさに官能が蕩け、発狂することさえ許されない。耳穴深くにまで舌を押し込まれ、辛いほどの異常快楽を叩き込まれる。さらには串刺し触手も優しく抜き差しを開始し、

連続絶頂でひくつく粘膜を容赦なく可愛がつてきた。悪魔の尿管に屈服したヒロインの女体は、それだけであつけなく苦痛と真逆の境地に囚われてしまう。

「ちゅっ……んちゅ。ふふ、気持ちいいんでしょ……正直に言いなさい？ ふふ、んちゅぶ、ちゅっ！」

「は、はひい。いいれふ……きもひいいれふう！ みみも、あそこもきもひい……いつぎああア！」

べりっ！ ずぶずぶ！ 答えている最中にも羽根をむしられ、乳首深くに針を刺された。瞬間、媚びきつた甘声が痛ましい悲鳴に取って代わられる。だが。

「どう？ これもいいでしょ？ ねえ……ねえ！」

「は、はひ……ひん、い、いい！ はねいたひい、ち、ちくびもくるひいのお……れも、れもいいのお、きもひいのおおお！」

神の声に逆らえず、恥知らずな答えを零す淫乱天使。異常な快楽に犯された少女の心身は、胸と羽根を苛んでいる苦痛にさえも、マゾヒスティックな虐待を覚え

始めているのだ。コリコリに勃起した乳首を穿り返されるのが、僅かの容赦もなく身体を傷つけられるのが、たまらなく気持ちいいと倒錯してしまう。

——だ、だめ。わたし、もうダメえ。狂ってる、もう壊れてる……あああ、もうダメえええ……！！

意識が保てない。何も考えられない。もう、何が気持ちよくて何が痛いのかわからない。

「もつと感じていいよ……おっぱいの中、お姉ちゃん的大好きなママとお友達が入ってるんだよ？ ふふ、大好きな耳もたつぷり可愛がつてあげるからね！」

ずぶりっ、ずぶずぶずぶうっ！ 十字架が思いきり

ねじ込まれ、乳房の奥にまで達する。同時に涎まみれの舌が窄められ、耳道の奥深くにまで捻り込まれた。

ちゅぼん！ ぬるっ、ちゅぶちゅぶちゅぶ！

「ふあああ、ママあ、えりこほおお！ み、みもちく、びも深ひのおお、き、きもひよすひるよおおお！」  
鋭敏すぎる乳腺を抉り抜かれ、切ない快感が胸を焦

がす。同時に内耳にまで肉舌を突き込まれ、死んでもいいほどの幸福感を叩き込まれる。大好きな耳を舐められる快感、大事なロザリオで虐められる悦び——狂った思考は、それを大事な想い人の手による幸福だと錯覚してしまっていた。

——ママも、恵理子も、わたしのこと可愛がつてくれる。あはは、わたし、なんて幸せなんだろ……！

壊れた——少女の魂を支えていた大事なものが、音を立てて崩れていく。その瞬間を狙いすまし、串刺し触手が再び少女の最奥に幸せの証拠を叩き込む。

どばっ、どばどばどばどばあああっ！ 子宮口にまで捻り込まれた触手螺旋が、再び大量の媚毒粘液をぶちまけた。

「んふあ、あひっ!? ま、まは出てるう……ミルクう、大好きなミルクいっぱい出てるうう〜！」

どくんどくと脈動する射精の快感が、尻から食道を通って膣内奥までを蕩かせる。牝を狂わせる悦びが、

奥の奥までたつぷりと注ぎ込まれる。心まで壊れてしまったいまの天使が、その幸福に耐えられるはずがなかった。壊れた意識が、快楽で消えていく——！

「イ、イク……またイクうううう！ イクのおお、いいい、イっひゃうふのおおお〜！」

ビク、ビクビクビク！ 限界まで仰け反らされた顎が痙攣し、影槍を咥え込まされている幼門が壊れたようにひくついた。大きく開かれた股間から、大量の白蜜が潮を噴く。苦痛と快楽、そして倒錯と妄夢にまみれた幸福の中、ユミエルは凄艶な絶頂を極めさせられてしまっていた。

「ひいん……イ、イっひゃ……はひいん！ んふうう、ごつぶおああア〜！」

少女がいつても巨大触手は粘液噴出をまるでやめず、あらゆる穴から白濁液が逆流し続けた。鼻と口から逆流した汚液が惨めにアへ顔を汚し、顎と髪から糸を引く粘濁がボディスーツを汚辱する。前後の穴から噴き

出す恥液が、太ももを伝ってニーソックスをもどろどろにした。触手巻きにされているおなかはごぼりごぼりと艶かしく脈打ち、十字架磔の肢体は辛そうに痙攣している。長く長く尾を引く随喜に、串刺し聖女は白濁をぶちまけながら延々と悶え狂うしかなかった。

「ひっどいお顔。ふんっ、もつとイきなさいよ……ほらあ、イってイって、死んじやいなさいよお！」

少女が絶頂しても魔少女の責めはやまず、舌責めもロザリオピストンも激しさを増すばかりだ。幼い身体を押し付け、嗜虐心に腰をくねらせ天使を虐め続ける悪魔の姫。涎だけでなく糸を引く精液までを耳に塗られ、情け容赦ない勢いで乳首をピストンされる。

「ひいん、し、死ぶ……ひふあああ、みみらめ、ちくびらめええ！ そんなひされたらあ、ま、また……！」

絶頂している間にさらに注がれる魔悦。もう、たまらなかつた。耳が溶け、乳首が爆ぜる——！

「イふ、イふイふイふうう！ えりこお、ママあ……」

：あひやああ、わたひ、またいつひやうよお〜！！

ぶしゃ、ぶしゃぶしゃぶしゃあああ！ 先ほどの絶頂蜜も止まらぬ最中、再び休む間もなく潮を噴かされる淫虐の天使。耳と乳首で同時にイカされ、イっている最中に再び全身ピストンで飛ばされる。脳まで快樂漬けにされ、ユミエルは獣のような声で鳴き続けた。

「イク、イクイクイクう！！ まはいつへるうう、イクのっ、イクのとまらなひいいいいいい！！」

もう、どこでイっているのかわからない。何度イったのかもわからない。イっている最中にイカされ、イクのが全然終わらない。地獄じみた快樂の輪廻に、イってイってイキまくる淫乱天使。狂ったように羽根を散らす片翼に、少女の爪が根元までめり込まされた。

「ん、ひっ!? そんな、ぎ！ ま、またイひ……！」

引き千切られる。痛い。怖い。でも……イクのが止められない、だって、イクのはキモチイイ！

「いいわよお。ほら、またイきなさい！ イキ狂って



天使じゃなくなっちゃいなさいよお、あはは！」

「そ、そ……んぶああ、イツひぎいいいいイツ！」

メリメリッ、ブヂイイイ！ 光の翼が、一気に根元から引き千切られた。再び背中に駆け巡る激痛。苦悶に絶叫した瞬間、胸を貫くロザリオもいつそう深くめり込まされる。処刑された天使の口から漏らされたのは、絶望の悲鳴ではなく、幸福の嬌声だった。

「イク……あひいまたイク、イクイクイクイクイクイクイクウウウ——!!」

痛い痛い痛いイタイイタイ、けれどキモチイイ。壊された少女の官能は、もはや苦痛も快楽も区別できない。絶頂途中に味わわれた死の実感は、少女にこれ以上ないほどの幸福を味わわせてくれた。

「ママあ、恵理子お……見へへえ、わたひまたイクよお！ またイツちゃうのお、天使じゃなくなつてえ、イ、イキ狂つひやうのおおおオ——ッ!!!」

ぶばああ、ばつばああああ！ 最後の光羽が周囲に

舞い、大量の本気蜜が噴きあがる。零れる涙、舞い散る汗、噴き出す吐瀉液に逆流する白濁——光の羽根に照らし出され、屈服の証がキラキラと輝く。翼をもぎ千切られた衝撃で、少女はまたしても天国へと上らされてしまっていた。光を失った瞳は、大切なものを失った喪失感と狂った幸福感に打ち震えている。

「あははは、両方とももぎ取つてやったわ！ これでもう、お姉ちゃんは天使なんかじゃないねえ……虐められてイキまくっちゃう、ただの狂人だよ！」

もぎ取つた光翼をビリビリに引き千切り、オメガエクリプスは勝ち誇つた哄笑をあげた。両の翼を失つた聖天使は、もはや言葉を返すことも、いや考えることさえできなくなつてしまっていた。

「んひいい、ひい、ひいい！ あひやあそうなのお、わたひ天使なんかじゃなひ……で、でもイツひやう……またイクの、イ、イキまくつひやうのおお〜！」

ただひたすらに喘ぎ、悶え、イキまくる。心を颯ら

れ肉体も犯し尽くされ、想い出も何もかもを汚し尽くされた。ぼろぼろにされた傷跡に刷り込まれた惨めな快樂だけが、いまのユミエルにとつてすべてだった。

天使は、壊されていた。そんな少女の心に残った最後の感情は——

——ママ……恵理子お。わ、わたし……。

幸せ——それは、最後に残された慈悲なのか。

「あはは。わたしの勝ちよお姉ちゃん……聖天使ユミエル！ 我ノ勝利ダ、貴様ノ全テハ我ノモノダ……終末ダ、貴様ハ終ワッタノダ。クハハハハハハ！」

もはや意味を成さない視界の中、巨大な悪魔の影が広がっていくのがわかった。だが、もはやユミエルには、その言葉に答えることもできなかった。

「イ、イクうう……ママあ、恵理子お。幸せなお、わたひもつと、もつと幸せになっひやううのおー！」

闇の世界でいつまでも続く、淫惨な嬌声と邪悪な哄笑のハーモニ。

闇の中に佇むのは、十字架に磔られ身体を串刺しにされ、胸に杭を突き立てられて羽根をむしられた敗残の聖少女。そのシルエットは、まるで宗教画に描かれる悪魔懲罰のイコンさながらの荘厳さだ。

だが——勝利したのは、天使ではなく悪魔なのだ。この磔は解かれることなく、胸に突き立てられた杭は抜かれることはない。

光翼天使ユミエルは、完全に敗れ去ったのだ。「ククククク、ハハハハハハハハハハハ！」

完膚なきまでに敗北した正義のヒロイン。もはや、邪悪を止められる者など存在しない。

世界は、幼き暴君の手に落ちようとしていた——。

「うふふふ。そんなにお姉ちゃんが大事なら、ママも一緒にしてあげる……わたしの手で、お姉ちゃんみたいに処刑してあげる。終末ノ快樂をあげる！」

「う……ああ。いやあ……ああああっ!？」

天井をも覆い尽くす巨影が伸張し、無数の触手を形成する。戦慄く両手に、二本の影蛇が巻きついた。そのまま凄まじい力で両手を引き上げられ。身体が浮遊する。地面に伏していた聖母は、床から一気に引き剥がされ空中高くに吊るされてしまっていた。両手は左右に引つ張られ、両足は重力に従って投げ出される。Yの字で空中拘束された肢体から、コスチュームに染み込まされている粘濁がぼたぼたと垂れていく。

「ぐううう、う、く……!？」

両肩に体重がかかり、手袋に触手が食い込む。苦痛に呻く天使の姿に、魔姫は残酷な笑みを浮かべていた。「気高い天使に、土下座なんてさせてごめんね。これはお詫びの印……素敵な格好にしてあげる！」

地面を埋め尽くす触槍の群れが、宙吊り天使の真下へと集つていった。天使の眼下で肉紐同士が融合しあい、一つの肉のオブジェを作り出す。

「ひっ……ああ、ああっ!？」

眼下の光景に、マリエルはたまらず悲鳴をあげる磔聖母。ブーツの真下数メートルほどに、天へ向け高く伸びた一本の巨柱が構成されていた。伸びた肉樹の先端は、十字に分岐している。それは、巨大な十字架だった。

もつとも形こそ同じだが、それは神聖な十字ではありえない。なんとという邪悪で、そして背德的な威容だろう——影で形成された柱はすべて光を呑み込む闇色で、真つ赤な血管が無数に張り巡らされていた。ところどころが歪いびみに歪み、浮き出した肉瘤がドクドクと脈を打っている。天突く柱は亀頭じみた造形で、先端からは先走りのごとく粘濁液まで吹き零していた。

「ママは本物の天使だもん。天使の最期に相應しいの



はやっぱりこれ……十字架磔で処刑してあげるねっ！」

「う、あ、ああっ。ひい、ひい……！」

残忍な処刑宣告に、擦れたような悲鳴が重なった。吊り下げられた生贄の心を、絶望と恐怖が押し潰す。

——いや。また、わたし……あの時みたい……！

忘れえぬ過去がデジャヴウする。先代の影魔王に敗れた時と同じ、十字架磔の陵辱刑——深く刻まれた敗北の傷跡が、恐怖で穿り返された。吊られている女体が震え、四枚の翼が光を弱める。あれほど激しい責めを飢えきったいまの身体に施されたら、もう——！

「いや、いやあ！ あ、あれはもう許し……ひっ!?」

無意識のうちに漏れてしまった哀願は、突如引きつった悲鳴に取って代わられた。空中で固定されている身体がガクンと位置を下げ、スペルマまみれの金髪が翻る。手袋に絡みついていた触手の拘束が緩められ、結果重力に従って真下へ身体が滑っているのだ。

「う、ああ。くうううっ！」

落下の衝撃で両巨乳がたぶんと揺れ、それだけで淫乱なおっぱいからは快樂ミルクが漏れてしまう。腕に巻きついた触手がずると滑り、手袋越しにぬるついた摩擦感を覚え込まされた。鋭敏ボディに走る虐悦に呻くマリエルだったが、真の受難はこれからだ。聖女の落下方向に聳えているのは、天を突く巨大な肉十字の先端なのだ。このまま滑落を続けられ——

——あ、あああっ！ そんな……っ！

真下へ目を向け、聖母は思わず言葉を飲み込んだ。真っ直ぐ伸びた肉根は、ちょうど身体の中心線の延長上に位置している。このまま落下すれば——両足の間に当たってしまう。牝穴を、串刺しにされてしまう！

「そ、そんな。だめよ、あ、あんな大きい……っ！」

いまだ粘膜を剥き出したままの秘裂が、怯えたように痙攣する。影の十字架は、あまりに太くおぞましかった。真上に突き出した柱の径は自分の太ももほども

あろうか。肉の塊が高密度に集い、まさに鉄柱のごとき威容を誇っている。巨大な亀頭には無数の血管が走り、びくびくと生きているように脈打っていた。

見ているだけで子宮が軋むほどの極太凶器。あんなモノで、真下から突き穿たれてしまったら——！

——こ、壊れる……無理よっ。死んでしまうッ！

誇張ではない。ただ入れられるだけでも膣を壊されかねない巨剛根を、急降下の勢いを乗せたまま深々と突き刺されるのだ。変身で強化された肉体とはいえ耐えられるものではない。まさに、処刑だった。

「い、いやっ……いやあ！　くう、うううッ！」

十字架磔刑どころの生ぬるさではない。巨大な十字架で女の急所を串刺しにされ、腹の内側から殺される——淫惨極まりない終末から逃れようと、マリエルは必死でもがきまくった。光を弱めている翼を無様に羽ばたかせ、なんとか宇宙に逃れようとする。

だが、無慈悲なる王はそんな抵抗を許さない。

「無理だよ。終末からは逃げられないっ！」

天井の影がねじれ、巨大な黒槍を形作る。風を切り猛進する先端が光翼に迫り——ズブズブズブッ！

「が……ぎひひひいっ！」

四本の触手槍に、それぞれの翼が貫通された。凄まじい激痛に、声を引きつらせ絶叫する被虐の天使。傷口から暗黒の魔力が侵食し、奇跡の光を蝕んでいく。痛む翼を必死で羽ばたかせるも、もはや飛行能力は奪われてしまっていた。ならばと必死で触手を掴んで縄り付くも、手袋は粘液でヌルヌルと滑ってしまう。

「ぐう、きひい！　だめ、そ、そんな……っ！」

握力も限界に達し、両掌からずると触手が滑り抜けた。もはや飛翔する力もない。悲鳴をあげる間もなく、生贄の身体が一気に重力に引きずられた。

墮ちる——残酷な処刑台へ一直線に落ちていく！

「無理だよママ。足掻いても無駄、もがいても無駄！　終末は避けられない……さあ、処刑執行よおッ！」

「いや……いやあ、いやああああああつ！」

残虐な布告と、痛ましい悲鳴が重なりあう。精液まみれの金髪が逆巻き、紅いヴェールがはためいた。破れかけの翼が光羽を散らし、豊満巨乳がぶるんぶるんと揺れまくる。捲れ上がったスカートからは、股座が露に覗いていた。粘膜口を開けたままの牝壺と、真下で待ち構える十字柱が刻一刻と接近し——ついに

「あつ、あああつ！ 入る……は、入って……るうううううううウーッ！」

みぢつ、めきめきめきい！ 凄まじい絶叫とともに、身の毛もよだつ断裂音が響き渡った。挿入、などという生易しいものではない。落下の勢いを乗せたまま、肉剛槍に力づくで貫かれたのだ。力任せに股間が穿たれ、巨柱の根元まですべてが一気にプチ込まれる。

「くああア！ ひぎいい、ぎ、いいいいイ——ッ！」

一瞬、思考も意識も消し飛んだ。膣が限界までこじ開けられ、子宮奥にまで極太棒がめり込まされる。膣

内をパンパンに肉詰めされ、秘粘膜は摩擦でこそがれていた。脳天にまで突き上がる激痛に、喉を仰け反らせ泣き叫ぶ串刺し天使。あまりの激感に、か弱い女体はあっけなく崩壊した。絶頂できない膣穴ではなく、もう一つの噴出孔が屈服の証を垂れ流す。

「あふあ、あ、ああお!? ひあああ、お、おしっこお……おおお、おふああああおおおおお！」

ぷしゃ、ぷつしゃああ！ 大腿に開かれた股間部から、凄まじい勢いで黄金の飛沫が放たれる。想像を絶する惨苦に神経と筋肉を壊され、マリエルの女体は、惨めな排泄行為に及んでしまったのだ。

「は、はひひい。いやあああ、こ、こんなあ……とまらないい、おしっこ出て……ああ、ああおおお！」

あまりに無様な自分の姿に、気絶寸前の聖母も羞恥心を取り戻す。スペルママみれ的美貌が赤く染まり、恥辱の涙が泣き黒子を濡らした。責めに屈しての粗相など、仮にも人の親である人間として許されるもので

はない。悩乱する淑女だったが、しかし涙に濡れた表情は同時に淫らな陶醉を隠せないでいた。

——ああ、あはああつ。き、気持ちいい……おしつ

こ漏らしてるのに……き、気持ちいいなんて……!

滾りきっていた下半身から、たまっていたものを吐き出す解放感。絶頂を禁じられ飢えきっていた女体は、放尿行為にさえ倒錯した幸福を覚えてしまっていた。オルガには到底適わないが、しかし恥辱排泄の爽快感は、いまの女体にとつては甘美すぎるご褒美なのだ。

「あおおお。あはあ、あ。あお、お、おふあ……あ」

長く長く続く放水に、ヴェールを揺らし陶醉する変態聖母。漏れた尿が太ももを垂れ、聖なるブーツを黄色く濡らす。一時の解放感に酔い痴れるマリエルだったが、幸福の時間は長くは続かなかった。

「ああ、はあ、あ……が! がぐ、ぎ、いい……!」

救済とも呼べる放尿が終わり、蕩けていたアへ顔が苦痛に歪む。数秒遅れで実感されてきた——飢えきつ

た鋭敏膣に収められている、恐るべき巨柱の破壊力が。

——う、うううっ! 太い、硬い……お、大きすぎ……い!

ミヂツ、と膣内で何かが軋んでいた。凄まじい苦痛と圧迫感が、肉唇から秘奥までを満たしている。明らかに入り口より巨大な鉄柱を無理矢理ブチ込まれ、聖母の膣は誇張ではなく破壊されてしまっていた。輪姦ですでに緩みかけていた蝶番は限界を超えて左右に開ききられ、膣肉を引き裂かれ膣粘膜は押し潰される。十字架型のスリットから覗く下腹は、膣奥まで挿入された巨大柱の形そのままに膨らんでいた。両足は自然と左右に開脚され、十字架の横柱に左右それぞれの足を乗せた格好になっている。マリエルは下のお口で十字架を啜え込みながらその上に座り込んだ、背信的なお座りポーズで串刺し刑に処されてしまっていた。

「ぐうう……き、ひいつ! ん、ぐ、あア……!」

痛い。苦しい。悲鳴が、もう声になつていない。横



に伸びている肉橋が尻肉に食い込み、柔らかな太ももに硬い柱がめり込んでゐる。だが、そんな痛みなど腹腔を満たす激烈な圧迫感とは比べ物にならない。高位置の不安定な姿勢において、体重のほとんどは十字架との結合部にかかってしまっているのだ。極太の肉柱は腔壁を破壊しながら、子宮奥まで届いていた。

——ふ、深すぎるうっ……子宮が、潰れてる！

愛液の潤みも先走りのぬめりも、気休めにさええなりはしない。あまりに規格外、圧倒的すぎる存在感。腹腔すべてをみぢみぢに満たされ、凄まじい圧迫感に下半身が支配されている。先端部は子宮口にまで達しており、苛烈な惨苦が脳天にまで突き上がっていた。極太の根元までを一気に啞え込まされている肉門は、信じられない広さに拡張され粘膜を覗かせている。漏れ出した汁液が、小便と混じって黒巨柱を濡らしていた。「あはは、涙流して、おしっこまで漏らしちゃって。わたしからのお礼、そんなに嬉しかったあ!？」

影魔たちさえ声をなくす淫虐刑に、しかし主催者は酷く上機嫌だった。敗北のヒロインが晒す末期の姿に、オメガエクリプスは満足げな笑みを浮かべている。

「磔ばかりでもつままないでしょ。敬虔なシスターが聖なる十字架にお座りっていうのも面白いと思っただ……まさかおしっこまで漏らしちゃうなんて。ふふふ、とんだ罰当たりな変態聖女だよねえママは！」

「んう、ぐううっ！ や、あ……ぎ、ぐ……！」

尊厳を貶める言葉に対しても、もはや反論する余裕さえない。恥辱と苦痛に心身を限界まで苛まれ、マリエルはただ美貌を赤らめ悶えるしかなかった。

「ふふふ、声も出せないぐらい感じてるの？ いやねえママ、本当のお楽しみはこれからの……」

にやり、と笑うオメガエクリプス。極限まで追い詰められた天使に、いよいよ最後の処刑が下される。

「特別に許してあげる……わたしの手でイカせてあげる。大丈夫、お姉ちゃんには手は出さないから……だ

って、ママと遊んだほうが楽しそうなんだもん！」

「ん、え……あ、あいいイっ!？」

苦痛と恥辱で何も考えられなかったはずの思考に、パッと光が灯った。イケる。イカせてもらえる——その言葉を聞いた瞬間、あさましくも胸がトクトクと高鳴り始める。押し潰されている子宮が疼き、限界まで拡張されている肉門から新たな蜜がたらりと零れた。

——イ、イケるの？ わたし……やっとなりてくよくよなれるの？ この苦痛からも、解放されるの……？

イケる——そう考えただけで、身体中が狂おしい疼きを思い出していた。乳首がコリッと充血し、お腹が熱くなる。串刺されている光翼が震え、両足が切なげに戦慄いた。娘に危害は及ばず、自分は気持ちよくなる——散々お預けを食らわされた上に地獄の苦痛に苛まされる現状、それはあまりに甘美な誘惑だった。

「イ、イケる……の？ イカせて、くれるの……お？」

生唾が出る。ごくり、とはしたなく喉が鳴った。蕩

けきった哀願に、少女は屈託のない笑みで応えた。

「うんっ！ そうだよママ！ 一言お願いするだけでいいよ。それだけでイカせてあげる。イケるんだよ、辛いことも苦しいことも忘れて、気持ちいい天国に！」

「あ、あああ……！」

その未来を意識しただけで、目の前が薔薇色になった。考えるだけで子宮が下がる。巨大根を突き刺されそれでもなお生殺しのままの膣が、狂ったようにきゅんきゅんと捻りまくる。腰が淫らに揺れ、飢えきつたお口はだらだらと愛涎を漏らして期待に震える。

——もう……わたしっ、もう、もう……！

ずっと生殺しだった。こんなにも太い逸物を挿入されたのに、おしっこを漏らすだけで終わるなんてありえない。イキたい。イってイってイキまくりたい！

墮ちるのは自分だけ、ならば何を迷うことがある——醜い牝豚の本能が、賢母の自尊心を蝕み尽くす。

「も……あ、ああ。……カせて……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**



# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム  [Click](#)

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元  
ミルフィーユの新作PCゲーム情報も載ってるよ!

2次元  
ED DRAMA MAGAZINE

悪魔の娘

偶数月  
17日発売

二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法少女

奇数月  
12日発売

コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

コミックプリズム vol.6

440yen

はや  
コミックプリズム

イツちゃんを♡

不定期  
発売

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

メカメカミクラインス

ククラインス

強く美しいヒロインが  
淫らに墮ちる  
アンソロジー!

奇数月  
中旬発売

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

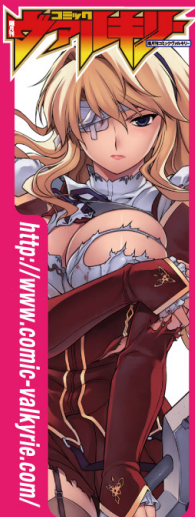
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!